第７０期生に聞く「幹部への第一歩」



航空自衛隊幹部候補生学校
一般幹部候補生　空曹長　内山　皓介

１　はじめに

防衛大学校を卒業し、航空自衛隊幹部候補生学校に入校してから数か月が経過しました。７０期航空要員卒業生を代表して「小原台だより」に寄稿する機会をいただけたことに深く感謝するとともに、本稿が後輩たちの励みとなり、諸先輩方へ私たちの成長をお伝えする一助となれば幸いです。防大での４年間と幹候校での現在の生活を振り返ると、両者は連続した学びでありながら、求められる姿勢や環境は大きく異なるものがありました。今回は、その幹候校と防大の違いから自身の目指す将来像をしめしつつ、後輩たちに私の想いを伝えたいと思います。

２　幹候校と防大の違い

（１）同期の多様性

幹候校で生活する中で、防大との違いを最も強く感じたのは同期の多様性です。防大では同年代の学生が中心であり、価値観や経験が比較的近い者同士で４年間を過ごしました。しかし幹候校では、一般大学出身者（Ｕ学生）、部隊経験者（Ｉ課程）、航空学生（Ａ課程）、医科歯科看護科（ＭＤＮ課程）など、年齢も背景も大きく異なる同期と共同生活を送ります。Ｕ学生には自衛隊に入隊したばかりで、大学や一般企業等での知識や経験を踏まえた柔軟な発想があり、私たち防大出身者の考え方が凝り固まっていると気づかされる場面が多くあります。また、Ｉ課程の同期は部隊での経験があり、まだ部隊を経験していない私たちにとって非常に参考になる話をしてくれます。例えば、現場での指導の難しさや幹部に求められる姿勢等の現場部隊の実情を具体的に教えてくれます。このように価値観の異なる同期と寝食を共にし、交流を図り、時には異なる考え方から衝突することで、自分の考えがより深まっていき、部隊運営に必要な思考力や行動力へとつながっていくと実感しています。このような防大では得られなかった視点に触れることで、幹部になるにあたり自身の視野がより大きく広がりました。多様な同期と共に学ぶ環境こそが、幹候校の大きな魅力であり、自分を成長させてくれる原動力になっています。

（２）「幹部とは」を常に考える日常

幹候校での生活では、「幹部とは何か」「幹部はどうあるべきか」を常に考えさせられます。ここでは、私たち自身が“幹部になる者”として自ら考え判断し、行動するとともにその中でなぜするのかといった説明が求められます。あわせて、幹部としての立ち居振る舞いを日々追求しています。

幹候校では係活動や当直業務があり、その中で、勤務方針の策定、朝礼や教育の企画、指導受け、実行、監督指導までを学生自身が担い、限られた時間の中で判断しなけれ

ばならない場面が多くあります。さらに、年齢も経験も異なる課程の同期をとともに生活や勤務行うため、自分の考えをどのように伝え、どう理解してもらうかを常に工夫する必要があります。同じ「同期」であっても入校するまでの環境や背景が違えば受け止め方も異なり、判断の難しさは防大とは大きく異なります。私自身、学生全体の服務面を統括する係を拝命しましたが、「ここまでやれば正解」というものはなく、終わりがありません。服務状況をどう改善するか、どのように同期へ浸透させるか、何を優先すべきかなど常に考え続けることが求められます。その自分の判断が、年齢も経験も異なる同期の行動に影響するという難しさを日々痛感しています。幹候校では、その自身の考えを「幹部としてどう行動に移すか」が問われます。正解がない状況でも、自分の判断を言語化し、同期に説明し、理解してもらい、組織として行動させる必要があります。まさに、幹部としての覚悟と責任を日常の中で体感する場所だと感じています。このような環境に身を置くことで、幹部としての自覚が自然と芽生え、「幹部とは何か」を考える時間が防衛大学校の学生舎生活よりも圧倒的に増えました。防大で学んだ知識や経験が「基礎」だとすれば、幹候校での生活はそれを幹部としての行動へとつなげる「応用、発展」といった過程であり、これらにより私は自分自身の成長を強く実感しています。

３　後輩に伝えたいこと

後輩に伝えたいことは数多くありますが、私が一番強く伝えたいのは「すぐに答えを求めないこと」です。防大では、上級生がこれまでの経験をもとに、教育・訓練の中での正解や定型書類（フォーマット）の書き方、学生舎生活で直面する課題や問題へのアプローチ、解決方法等を知っています。下級生からすると目の前に「答え」が多くある環境と言えます。もちろん、答えを聞くこと自体が悪いことではありません。上級生の知恵を借りることは、防大の良さであり、組織としての強みでもあります。ただし、その前に一度、自分自身で「どうすべきか」「なぜすべきなのか」を考える時間を持ってほしいと思います。できることならその考えた自身の計画を実行してほしいです。防大にいる今だからこそ果敢に挑戦し、学生である今だからこそ、失敗していいと思います。むしろ失敗の方が多く学べます。すぐ答えに飛びつくのではなく、「自分で考える」というプロセスを大切にしてほしいです。

４　おわりに

防大での４年間、そして幹候校での生活を通じて、私は「同期の存在」と「思考し続ける姿勢」の重要性を強く感じています。戦後最も厳しく複雑な安全保障環境と言われる今、私たち幹部自衛官に求められるのは、変化し続ける状況に対して常に考え、判断し、行動し続ける姿勢だと考えます。 答えが用意されていない時代だからこそ、自ら思考し続ける力が不可欠であり、その姿勢こそが幹部としての価値を決めると確信しています。そして、悩んだ時、苦しい時に支えてくれるのは、これまでも、そしてこれからも「同期」です。防大で共に汗を流し、幹候校で考え方や価値観の異なる仲間と議論し、時に衝突しながら成長してきた経験は、私にとって何よりの財産です。どれほど環境が変わっても、同期の存在は自分を奮い立たせ、前へ進ませてくれる力になります。残りの課程生活においても、私はこの姿勢を忘れず、全力で取り組んでいきます。そして、部隊で求め続けられる幹部自衛官となれるよう、日々研鑽を重ね、胸を張って任務に臨めるよう精進していく所存です。